

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00071

研究課題名(和文) アビダルマ以後における仏教的存在論と恒常的存在の存在論証との論争の系統的研究

研究課題名(英文) A methodical Study of the dispute between Buddhistic Ontology after Abhidharma and the proof of the permanent existence

研究代表者

狩野 恭 (KANO, Kyo)

神戸女子大学・文学部・客員研究員

研究者番号：70204592

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：研究課題の内容についての具体的成果は以下のようなものである。(1)『アビダルマ・コーシャ・パーシャ』をはじめとするアビダルマ文献の関連個所の解析については、オーストリアアカデミー前所長故クラッサー博士の追悼記念論集に長編の英文論文(約40ページ)にまとめ投稿した。すでに最終校正は終了しており、2023年夏前には出版される予定である。(2)『タットヴァ・サングラハ』冒頭の4つの章の校訂テキストと和訳、訳注については、2つの章についてはほぼ完成し近く発表予定である。他の2章について、また、(3)『プラマーナ・サムッチャヤ』(4)『ニヤーヤ・マンジャリ』についても現在発表の準備を行っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、インド思想史における仏教と仏教以外のブラフマニズム諸派との存在論をめぐる論争の萌芽的段階を解明することを目的とした。この論争は、要素の集合によって存在が成り立っており、それゆえあらゆる存在は無常であるとする仏教徒に対して、それら要素の主体、その目的となる存在など、恒常な存在を認めようとする諸派との論争として開始される。アビダルマ文献にはその萌芽的かつ本質的論争がみられるが、これまで、この問題を体系的に取り上げた研究はなかったといつてよい。その意味で、本研究はこの問題を整理して解明することでインド思想史上の重要な問題の初期の様相を解明するものとして重要な意義を有するものと思われる。

研究成果の概要(英文)：The results of the research plan are as follows:(1) The analysis of the related passages of Abhidharma Literature such as Abhidharmakosabhasya will be opened as a long English article (consisting of about 40 pages) dedicated for "Helmut Krasser Volume." The last proof is already finished, and it will be published before summer 2023. (2) With reference to the Japanese translation with notes of the first four chapters of Tattvasamgraha, 2 chapters of them are already finished and will be published soon. I am now working with the translation of the rest of 4 chapters and the related passages of Pramanasamuccaya and Nyayamanjali.

研究分野：インド思想史

キーワード：アビダルマ アートマン 集合(samghata/samudaya) ブドガラ サーンキャ プルシャ 原子論 ヴアイシェシカ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

インド思想史において、仏教内部の論争のみならず、仏教と他のブラフマニズム諸学派との論争は極めて重要な位置を占める。なかでも、あらゆる存在の無常性を説き、人格主体などを認めない仏教の存在論とアートマン、プルシャなど何らかの恒常的存在を認めるブラフマニズム諸派との存在論をめぐる論争はその中心となる論争である。しかし、この論争について、これまでの研究では、部分的な指摘はあったものの、この論争がどのような問題をめぐってどのように開始され、また、根本的対立点がどの点にあったのかについて整理されて解明されることはなかった。

一方で、筆者はこれまで、サーンキヤ学派のプルシャ、ニヤーヤ学派のアートマン、イーシュヴァラ（主宰神）など実在論学派各派の根底となる恒常的存在の存在論の系譜を研究し、これらの論証にはその思想と論理、具体的用語などにおいて密接な関連性、共通点があることを見出してきた。しかしながら、それらは、個別の指摘にとどまり、論証史の初期におけるこれらの論証の共通の土壌、また、これら恒常的存在を認めない仏教徒の考え方の根本的分岐としての〈存在における諸機能の主体をめぐる論争〉とも呼びうる論争において、どのような議論が行われ、それは後のこれら恒常的存在の論証、そこで用いられる論理、さらには、対極にある仏教における無常観の根拠となるいわゆる「刹那滅論証」にどのようにつながっているのかについては未解明であった。

仏教史において、アビダルマ時代に書かれた多くの文献には、この恒常的存在をめぐる論争の初期の様子が克明に記録されている。そこには、仏教内においても、「ブドガラ」など人格主体を主張する人々がいたことが記されているし、対立するサーンキヤ学派、ニヤーヤ学派やミーマンサー学派、さらには文法学派などの諸学派と「記憶」「輪廻」「認識」など具体的な問題をめぐって論争が行われたことが記録されている。基本的に、仏教徒は物質的存在とは〈要素の集合〉に他ならないとし、そこに何等かの主体のような存在を認めない。一方、他の諸学派は「アートマン」「プルシャ」「ドラヴィヤ」など恒常的な主体を認めようとする。これらの諸派と仏教との初期の論争がアビダルマ文献に記録されている。したがって、アビダルマ文献におけるこれらの論争の解明は論争全体の解明にとって極めて重要な位置を占める。

## 2. 研究の目的

アビダルマ文献の代表作である『アビダルマコーシャ・パーシュヤ』は仏教的世界観、存在論を体系的に記述した書として知られるが、仏教的世界観について単に結論のみを体系的に述べた書ではない。そこには、随所に仏教内のカシミールの人たち（ヴァイパーシカ）をはじめとする様々なグループ、立場の人々の見解が論争として記されていることから明らかなように、同書は〈論争の記録〉としての意味を持っている。論争の相手は、仏教内の様々なグループ、さらには、仏教外の諸派に及んでいる。そして、これらの論争の中には、蘊(*skandha*)に関する議論をはじめ、随所に、要素の集合体 (*saṃghāta, samudāya*) 以外に何らかのもの (例えば *puṅgalā* [人格的主体], *dharmin* [存在要素を有する主体], *dravya* [諸属性を有する主体], *avayavin* [部分を有する全体]) が存在するのかという議論が具体的に記録されている。存在を単に要素の集合体と考えるのか、それとも、それ以外に何等かの主体としての〈もの〉があるのか、また、その要素とは何かという論争は、仏教内部や仏教以外の実在論学派との存在をめぐる基本的な世界観の違いを示すものとしてインド思想史上重要な論争である。また、それらの議論はそれらの存在がどのようにして認識されるのか、という認識論上の議論の出発点ともなっている。この何等かの〈もの〉は、さまざまな機能の主体と呼ばれるべきもので、その思想は、人格的主体としてのブドガラ、アートマン、プルシャなど仏教以外の学派の存在をめぐる基本的思想につながっている。

これらの問題を体系的に解明する研究はこれまであまりみられなかったものであり、アビダルマ時代の仏教存在論の研究のみならず、初期サーンキヤ学派の思想史、初期ニヤーヤ学

派やヴァイシェーシカ学派の思想史、そしてまた、インドにおける有神論思想史、ひいてはインド論理学の発展史にとって新たな視点を提示できるものと考えられる。この視点は同時に、これらの存在をどのように認識できるか、という認識論の歴史にも新たな視点を与えると考えられる。そもそも、仏教内の経量部と唯識学派、有部との認識論の違いも、この集合体の認識をめぐる論争がその重要な契機となっているからである。

### 3. 研究の方法

本研究では、この見通しの下に、具体的には、以上のような諸論争を以下の3つのグループのテキスト、すなわち、(a)アビダルマ文献そのものの解明、(b) その後の仏教側文献からの分析、(c) その後のニヤーヤ側文献からの分析、という3方向から分析することとした。すなわち、

- (a) 『アビダルマコーシャ・パーシュヤ』(AKBh)をはじめとするアビダルマ文献(漢訳文献を含む)の関連個所の解析。
- (b)-1 『タットヴァ・サングラハ』の冒頭の4つの章(Īśvara-parīkṣā, ubhaya-p , puruṣa-p , ātman-p )のうち、Īśvara, ubhayaの2つの章の批判的校訂テキスト作成と和訳、訳注の作成。
- (b)-2 『ブラマーナ・サムッチャヤ』や注に言及される関連議論の分析。
- (c) 『ニヤーヤ・マンジャリー』の関連個所の批判的校訂テキスト作成と和訳、訳注の作成。  
『ニヤーヤ・ブーシャナ』については、関連個所の訳注の作成。

特に(a)に関しては、『アビダルマコーシャ・パーシュヤ』、特に同書第9章(破我品)を中心に同書の他の章、また、同書に先立つ初期、中期の漢訳のみで伝わる文献など他のアビダルマ文献をできるだけ広く検討することとした。

この基礎作業に基づいて、

- A. 論証の形態(論証式の形態としての帰謬論証、自立論証)の発展の分析
- B. 論証の基礎となる思想と概念(*dharmin*, *dravya*, *avayavin*, *pudgala*, *puruṣa*, *ātman*, *Īśvara*)について分析する。
- C. 論証の際の論証式の具体的内容(主題、立証内容、論拠など)と形式はどのようなものであったのか、  
という3つの点から整理し、その連関と発展を可能な限り跡付ける。

### 4. 研究成果

(a) に関しては、『アビダルマコーシャ・パーシュヤ』、『アビダルマ・ディーパ』、『阿毘達磨大毘婆沙論』、『阿毘達磨順正理論』、『阿毘達磨識身足論』などの関連個所を検討した結果、アビダルマの思想家達と仏教内のブドガラ論者、他のブラフマニズム諸学派との論争は、アビダルマ仏教の存在論の基本となる、存在 = 諸要素の集合(*samūha*, *saṃghāta*)という考え方に対して、少なくとも3つの観点からの論争があったことが明らかとなった。すなわち、(1) 集合の主体としての究極の要素は何か? (2) 集合という行為をつかさどる存在はあるのか、あるとすれば何か? (3) 集合は何のために行われるのか、すなわちその目的は何か? 以上であり、集合を「集合する」という動詞として考えた場合、これらの問いは、行為参与要素(*kāraka*)としての主格で示される主語、具格として示される集合行為の実質的支配者、与格で示される目的にそれぞれ相当する。

第一の集合の主体は、いわゆる原子論にたどりつく。アビダルマの思想家たちは、ヴァイシェーシカ学派と同様、物質的存在の最終要素として<原子>(極微)を考えていたが、この原子と、*dravya* などとの関係はあいまいで、いくつかの考えがあったと思われる。結論としては、

アビダルマの思想家たちの中では、究極的な原子(*dravyaparamānu*)、一見矛盾にみえる集合体としての原子(*saṃghātaparamānu*)、そして粒子(*anu*)という3段階の要素が考えられていたのではないかと考えられる。

第二の集合をつかさどる存在をめぐる論争では、集合要素が自ら集合するという仏教の考え方に対して、集合させる支配者として、ブラフマニズム諸派特にニヤーヤ学派、ヴァイシェーシカ学派からはアートマンや主宰神が主張される。また、これ以外にも、輪廻の主体、記憶の主体、認識の主体などとして、諸要素以外の存在が消去法によって証明される。

第三の集合の〈目的〉に関しては、諸要素が自らのために集合するのか、他のために集合するのか、という問いとして議論がなされ、前者を主張するアビダルマの思想家に対して、他者のためであることを主張し、その証明とともにサーンキヤ学派の人々は「プルシャ」の存在を論証しようとする。

全体として、論理的には消去法が大きな役割を果たしており、これが後のプラマーナ論の中で発展することになる。

(b)に関しては、恒常的主体、原因を認める立場にも様々あったことが他の文献(例えば、後の『サルヴァダルシャナ・サングラハ』など)からも知られるが、シャーンタラクシタやカマラシーラの時代、一元論的思考や二元論的思考、あるいはその折衷案などがあったことが『タットヴァ・サングラハ』冒頭のいくつかの章から知られる。また、恒常な存在についても、様々な名称と役割が考えられていたと思われる。これらは、現象世界の因果関係に介入する度合いによって、絶対的支配を考える場合や、カルマン、原子などの要因を考慮して結果を作り出すと考え、人間の努力などを一定考慮しつつ、結果の成立を司る考え方など様々であった。これらの議論はインドにおける有神論の発展上、重要な意味をもつものと考えられる。

これまで『タットヴァ・サングラハ』『タットヴァ・サングラハ・パンジカー』に関しては、内容や一部の翻訳を扱った研究は数多くあるが、批判的テキストの作成に基づく翻訳はあまりみられなかったが、写本を用いた批判的テキスト作成とそれに基づく翻訳が冒頭のいくつかの章について徐々に作成されつつある。

(c)に関しては、必要な写本の収集がほぼ終了し、校訂テキスト作成段階にまで到達した。校訂テキスト完成にまではまだ数年を必要とするが、準備段階は終了することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>狩野恭                           | 4. 巻<br>10         |
| 2. 論文標題<br>遍充関係のレベルの確定と逸脱 (vyabhicaara) | 5. 発行年<br>2020年    |
| 3. 雑誌名<br>インド論理学研究                      | 6. 最初と最後の頁<br>1-24 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし          | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-          |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Kyo KANO  |
| 2. 発表標題<br>Determination of the Level of Pervasion (vyapti) and Deviation (vyabhicara) |
| 3. 学会等名<br>The Sixth International Dharmakirti Conference (国際学会)                       |
| 4. 発表年<br>2022年  |

〔図書〕 計3件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>Kyo Kano etc.   | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>The Sanskrit Library  | 5. 総ページ数<br>552 |
| 3. 書名<br>Indian linguistic studies in honor of George Cardona, volume 2, Historical linguistics, Vedic, etc. Providence |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>Kyo Kano etc.  | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>Austria Academie of Sciences   | 5. 総ページ数<br>560 |
| 3. 書名<br>Reverberations of Dharmakirti 's Philosophy, Proceedings of the Fifth International Dharmakirti Conference Heidelberg, August 26 to 30, 2014 KELLNER Birgit - McALLISTER Patrick - LASIC Horst - McCLINTOCK Sara (Eds.) |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>Kyo KANO etc.                 | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>Austria Academie of Sciences  | 5. 総ページ数<br>500 |
| 3. 書名<br>Helmut Krasser Memorial Volume |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|